

# 認知特性の強みを生かしたアプローチとは

© 2017.12.24 : 認知特性の強みを生かした学習

認知特性は、WISC-IV や KABC-II などのアセスメント・子どもさんの得意なことや好きな遊び・幼児期のエピソードなどから把握します。個々の子どもさんへの学習指導の方略を立てるには、KABC-II のアセスメント結果がとても役立ちます。

## 英語 LD 児によくみられる認知特性

ここでは、英語の読みにつまずいている中学生への、認知特性に配慮した指導例を紹介します。

英語の読みにつまずきは、主に、アルファベットの音読み（「アブクドウ読み」とか「仕事読み」等言う場合があります。ここでは、以下「アブクドウ読み」で表現）の獲得につまずいてしまうことに起因することが多いです。つまり、文字と音の連合に弱さがあります。

しかし、KABC-II を実施すると、次のような強みが見つかることが多いです。

- 同時尺度が継次尺度よりも有意に強い
- 視覚的有意味刺激が強み
- 学習尺度が強み

## 英語のアブクドウ読みの獲得に視覚的有意味刺激の強みを生かした指導例

そこで、アルファベットの「アブクドウ読み」の獲得に「発音絵記号」という視覚的有意味刺激である教材を使います。

文字からは音が想起できないけれど、具体物の絵（視覚的有意味刺激）があることで、音を想起しやすいようにするヒントです。

初めて、「発音絵記号」の教材を使って指導したのは、平成 26 年 10 月に通級指導教室で出会った中学 3 年生の A 君です。A 君は、すでに、英語学習はすっかり諦め、英語の時間は寝ているか、他の教科の課題をこっそりやっているという状態だったそうです。

最初の通級指導の時間に調べてみると、A 君が獲得できていた「アブクドウ読み」は、アルファベット 26 文字中 10 文字程でした。そこで、どんな言葉でヒントとなる音を思い出すことにするかを相談しました。

次の通級指導の時間、A 君用の「発音絵記号」を作っていました。

「発音絵記号」を使って指導をしてみた初めての時間です。なんと、A 君は、実質 30 分ほどで、アルファベット 26 文字の「アブクド読み」を覚えてしまったのです。中学生になって 2 年半も英語学習をしても獲得できなかった「アブクドウ読み」があっさりと覚えられてしまったのです。本人もあっけにとられていた様子です。

「オレ、英語無理だ！」と諦めていた自分から、「オレも英語読めるようになるかも！」と、自分への見方が変わった瞬間でした。

指導していた私も、びっくりしました。子どもさんが持っている強みの力をまざまざと見せつけられた感がしました。そして、認知特性の強みを生かしたアプローチをすれば、子どもたちに、“オレ、英語無理だ！”と諦めさせなくてもよいということを確認した瞬間でもありません。

次の時間には、子音と母音のブレンディングの練習、その次の時間には、発音絵記号カードを並べて作った簡単な単語の読みのトレーニングをするというようにスモールステップで学習を進めていきました。

“どうせ英単語は読めん”と諦めていたA君が、文字に対応する音をつぶやきながら英単語を読もうと身を乗り出して取り組んでいる姿に出会えました。

A君の学校では、3 学期初めに「英語コンテスト」という取り組みがあります。課題プリントも 12 月になると配布されるので、通級の時間に課題の単語を発音絵記号のヒント付きで読む練習をしておきました。

3 学期が始まってからの「英語コンテスト」では、再テスト・再々テストと意欲を持って取り組みました。再々テストでは、英語→日本語課題 20 問を全問正解しました。日本語→英語課題では、20 問中 16 問正解できるという成果を見せました。

それ以後出会った、A 君と似ている認知特性の子どもさんにも、「発音絵記号」を使用して指導していますが、A 君同様、1 回の指導でアブクド読みをほぼ全部獲得します。後は、記憶の保持ができるよう、記憶が苦手な特性に配慮してあげることが必要です。

今年は、小学生のローマ字指導にも導入していますが、効果を感じています。

---

## 小さな自信から大きな自信へ

苦手な学習の習得(ボトムアップ)のために、認知特性の強みにはたらきかけ、“英語無理だ”から“英語読めるようになるかも”と自分への見方が変わることは、その子にとって英語場面だけにとどまるわけではありません。

“どうせ覚えられない” ⇒ “工夫したら覚えられる” へ、  
“どうせやっても無駄だ” ⇒ “やり方を工夫したらいいんだ” へ  
“自分は、勉強ができない” ⇒ “自分に合う勉強のやり方をやっていなかっただけだ” へ  
“自分は、バカだ。だめな人間だ” ⇒ “自分はバカなんかじゃない。やり方を工夫して、もっと力を発揮できるんだ！” へ  
“テストで点が取れないから、養護学校高等部しか進学できるところがない。” ⇒ “自分も夢を諦めなくてもいいんだ。” へ

このように自分に対して自信を持ち、自己肯定感が上がり、未来の可能性が高まっていきます。

---

## 認知特性への配慮は、未来の可能性を高めるためのキーポイント

従来の学校現場で行われている指導では、A君は、ただの英語ができない子、英語学習に意欲を示さない子という教師の評価のままです。

今も、A君のようなタイプが、英単語を習得するために、何回も書いて提出というみんなと同じ課題を出されている子どもさんが多いこと。この種の課題をやっても効果がないことは、当の子どもさん自身が一番知っていますから、やる気はでません。挙句、「みんなやっているのに、なぜおまえだけやらないんだ！」と叱責を受けることでしょう。

でも、“本当に叱責を受けるのは、子どもではなく、認知特性に配慮できない教員側なのだけだなあ”と、現場にいてずっと感じていました。

認知特性に合わない学習方略を押し付けられて、労多くて益無し。テストは低得点。その結果、知的な遅れはないのに、知的障害と誤解され、知的な遅れの子のための特別支援学級に入級させられ、養護学校高等部へ進学させられる悲劇が各地で起こっています。

そういう見立て間違い、子どもたちの未来の可能性を狭めることこそ、叱責を受けるべきではないでしょうか。

子どもたちが視覚的有意味刺激への強みの認知特性を発揮する姿に、毎回惚れ惚れしてしまいます。この子たちは、「授業での一般的な学習法では生かされていないけれど、すごい力を持っている！」と子どもたちの強みの力へのリスペクトがますます深まります。子どもたちが持っている強みの力へのリスペクトは、KABC-IIの認知検査をしているときにも、たびたび感じます。

テストの点数だけで子どもたちをみる場合とアセスメントを通じて子どもたちをみる場合では、子どもたちの見方が違う。この溝がなかなか学校の教員との間で埋められません。